

第1問 次の問い(問1～3)に答えなさい。

問1 次の a ～ e の傍線部の漢字と同じ漢字を含むものを、各群の ① ～ ⑤ のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は a — 、b — 、c — 、d — 、e — 。

a 都会のサットウに紛れ込む。

- ① 観光客がサットウする。
- ② お互いのケントウをたたえあう。
- ③ 前例をトウシユウする。
- ④ 企画案をケントウする。
- ⑤ 計画をトウケツする。

b 主人公がキユウチに陥る。

- ① フキユウの名作を残す。
- ② キユウリョウ地帯で牧場を営む。
- ③ キユウシヨウを訴える。
- ④ 真相をキユウメイする。
- ⑤ 会議がフンキユウする。

c 福利コウセイがしっかりしている。

- ① 新しいデータにコウシンする。
- ② 秋のコウレイ行事になっている。
- ③ 文化の発展にコウケンした。
- ④ オンコウな性格で人望がある。
- ⑤ 判決に不服なのでコウソシした。

d システムをセイギヨする。

- ① 経済をトウセイする。
- ② 書類をセイリする。
- ③ 海外にエンセイする。
- ④ 相手にセイイを示す。
- ⑤ 政敵をシユクセイする。

e 社会からソガイされて生きる。

- ① ソヤで乱暴な性格。
- ② 敵の攻撃をソシする。
- ③ この店がガンソだと言われている。
- ④ 会社のソシキ改革を行う。
- ⑤ 意思のソツリをはかる。

問 2 次の a ～ e の空欄()を補って四字熟語を完成させるのに最も適当な漢字の組合せ(ただし、漢字の順番はもとの熟語に使われている順番と同じとは限らない)を、後の① ～ ⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし同じものを繰り返し用いてはいけません。解答番号は a — 、b — 、c — 、d — 、e — 。

- a 紆余()()
- b ()想()外
- c 千()一()
- d ()謀()慮
- e 巧()令()

- ① 遠・深
- ② 奇・天
- ③ 言・色
- ④ 遇・載
- ⑤ 曲・折

問 3 次の a ～ e の空欄()を補って慣用句を完成させるのに最も適当なものを、後の① ～ ⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし同じものを繰り返し用いてはいけません。解答番号は a — 、b — 、c — 、d — 、e — 。

- a ()を囁^{ささ}む
- b ()をかける
- c ()を押す
- d ()を醒^さす
- e ()を拝^{たが}する

- ① 横車
- ② 躰^{たが}
- ③ 物議
- ④ 突破
- ⑤ 後塵^{こうじん}

第2問 次の文章を読んで、後の問い(問1〜5)に答えなさい。

(1) 私の魂がたえず帰りがつている(里)とは、こんな場所である。自然も人間も、どこかで結ばれていて、その網の目のなかに、それぞれの役割がある。それは、かつて私が遊んだ、世田谷に残る武蔵野の残像とは違う。単に自然が残る場所ではない。単に楽しくときを過ごす場所でもない。そして私にとっては出身地でもない。(里)の何が良いのかと聞かれても、知性で答えることはできない。無理に答えようとすれば、私は知性を使って偽造するしかないだろう。

そこはただ魂が帰りたい場所なのである。

ところで、「帰る」という言葉は、私たちの社会では、独特の響きをもつていたような気がする。たとえば、故郷を(ふるさと)と読んで、(くに)と読んでかまわないけれど、「故郷に帰る」というとき、人々は単に出身地に行くことだけを表現してはいなかった。故郷は出身地であることに変わりはないが、故郷に帰ることによって人生をやりなおすという意味を、この言葉はふくんでいた。

私たちの社会では、帰るとは、やりなおす、元に戻す、という意味をもっている。

そのことを明確に示しているのは、最近の歴史学、あるいは歴史社会学の研究である。なぜ日本の歴史では、徳政令がたびたび公布されているのか。一様をおこした百姓たちは何を求めたのか。そこに、一度元の状態に戻すという意志は働いていなかったらうか。もう一度、やりなおせる状態に帰ろうとする、そこに、日本的な改革の思いが存在していたのではなかったか。

帰ることによってやりなおす。それが伝統的な改革の精神であるとするなら、「故郷に帰る」という言葉もまた、帰ることによって人生をやりなおす、自分の存在を甦えらるという意味をもっていたはずである。そして、だとすれば、帰る先である故郷とは、人生をやりなおすことのできる場所だったのであろう。

とすると、私にとって(里)とは何か。それは魂が元に戻ることでできる場所である。近代化された社会では知性に圧迫されつづけた魂が、(里)に帰り、森と川と畑と風と、そして村の人たちとともに居るとき、元の自然な状態に戻っている。知性は自己

を主張するが、魂は自己を主張することの虚しさを、自然と村人との網の目のなかにただ存在するだけの吾を語る。

もちろん、そのようなものを魂と表現するのは不当なのかもしれない。私は魂とは何かを知らない。それが存在するかどうかも知らない。それに、私が書いている魂とは、靈魂とも違う。それは非知性的な人間の根源であり、ここではとりあえず魂と書いておくほかに、書きようのないものである。

(里)には、とりあえずそう書いておくほかないものが、いくつかあるのではないだろうか。たとえば、自然。この言葉も不適當な気がする。なぜなら明治時代に外来語の自然を意味する言葉を日本語に訳するために、自然という言葉は無理矢理あてはめられた。ところが、人間の外にある自然体系を表現するのが外来語の自然であり、伝統的な日本の言葉遣いでは、自然を人間の外にある客観的なものとはみていない。それは人間と時空をともにするもの、相互性をもちながらともに存在しているものであり、万物の動きのなかに、自然も人間も同じ時空のなかで流転しているものである。だから(里)の言葉遣いでは、森羅万象といつたほうがよほど正確なだけけれど、今日の社会では、とりあえず自然と記しておくほかない。

(2) (神)もそのひとつである。(里)の神は、少なくともキリスト教やイスラム教がみているような絶対神ではない。それは、昔から(里)を守り、(里)の人々や自然とともに暮らしてきた神々である。しかもこの神々は、その存在を証明する必要もない。昔から、人々が神々を感じながら暮らしてきたから、そのようなものとして神々が存在しているのであり、ここでは(存在させる)という人間と神々との関係が、神々を存在させるのである。Xが先にあるのではなく、Yがまず先にある。

そういう(里)の神々を神と記するべきかどうかはわからないが、ここでは神と書いておくほかに私たちは表現方法をもちない。

こんな問題は、(里)にはたくさんある。おそらく、それは仕方のないことなのだろう。なぜなら、(里)の世界は、しばしば、知性によってはとらえられない性格をみせるのだから。ところが言語の概念は知性と結びついている以上、(里)にある根源的なものを表現しようとするとき、言葉には虚しさがつまよう。(里)は、論理性を超越した、すべてのものが相互性をもちながら存在する時空のなかにある。知性だけでは到達できないような。

だから、私の魂は、たえず(里)に帰りがつている。

(3) 現代人は、一度、このような〈里〉を捨てようとした。そして、〈里〉を喪失した人々が生まれた。

それが進歩だと私たちは教わった。私たちは〈里〉を捨てて、もっと広い世界に出ていかなければいけないのだと。

ようやく、その虚しさに気づいてきた。もちろん私たちは、広い世界で活動することができる。私たちの前には、都市があり、世界がある。

だが、広い世界とは深い世界だったのだろうか、いま私は問い返す。私たちは、広い世界に目を奪われて、深い世界を失ったのではなかったのかと。

帰りたい世界をもちながら、広い世界で活動することもできたはずだ。人生をやりなおせる場所をもちながら、知性によって自己を主張しなくても、自然に自分の存在を認識できるような場所をもちながら、広い世界で動くこともできたはずだ。

しかし私たちはそのようには教わらなかった。〈里〉と、都市やインターナショナルなものとは対立しているように教わった。その結果、私たちは何を待たのか。帰属だけがある。だが所在不明。

知性は訳知りだから、帰属のなかに自分の存在をみつけた。ところが魂は〈魂〉を超越している。〈魂〉だけでは存在の場所をみつけたせない。

私たちは、二十世紀の終わりになって、知性だけに依存したことへの敗北を味わった。知性に依存するとは、知性によつてつくられた科学や技術、言語や概念、論理、政治や経済に依存することである。知性が作りだした人工的な世界に依存したといつてもよい。

人間がつくりだしたものにのみ依存した生。そのとき、人工的なものがつくられていく前からあった人間の根源的なものは、何に依存すればよいのだろうか。

二十世紀の社会のなかで、人々は平和を求めながら戦争を繰り返してきたではないか。自由を求めながら、どこか自由には生きていない私たちをみつめなければならなかったではないか。豊かさを求めながら、何が豊かさなのかさえ、わからなくなっていたではないか。自然についても、生命についても、それが何であるかをつかめなくなっていたではないか。

知性が作りだしたものは、こういう世界であった。何か根源的なものが欠落している。すべてが私たちの手のなかにあるのに、つねに何かがない。私たちの社会は、根源的なところで敗北していたのではなかったか。

おそらく、そんな思いが、現在私たちに〈里の在処〉を探させている。私はそう感じている。

(内山節里の在処(ありか)『より])

(注) こんな場所——筆者が大人になってから度々訪れ、やがて一年の三分の一ほどをそこで過ごすことになった、群馬県上野村のこと。

問 1 空欄 ・ に入れるのに最も適当な組合せを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選びなさい。解答番号は 。

- | | | | | |
|---|---|-----------|---|-----------|
| ① | X | 人々や自然との関係 | Y | 神々の存在証明 |
| ② | X | 神々と人間の関係 | Y | 神々の実在 |
| ③ | X | 神々の存在証明 | Y | 里の神々や絶対神 |
| ④ | X | 神々の実在 | Y | 神々と人間の関係 |
| ⑤ | X | 里の神々や絶対神 | Y | 人々や自然との関係 |

問2 傍線部①「私の魂がたえず降りたがっている(里)」とあるが、それはどういう場所か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 17。

- ① 自然とそこに生きる人間が相互性を持ちながら存在するなかで、普段は知性によって抑圧されている人間の根源とでもいふべきものが、元の自然なありように戻ることのできる場所。
- ② 豊かな自然にあふれ自分を温かく迎えてくれる人々が住んでいる出身地において、都会の近代的な生活のなかですっかり疲弊している自分の魂を、ゆつくりと休めることのできる場所。
- ③ 故郷の豊かな自然のなかで村の人たちとともに暮らしながら、自分のこれからの人生について深く考えることで、新しい自分に生まれ変わり人生をやりなおすことのできる場所。
- ④ 自然のもとで現代人が忘れてしまった伝統的な生活を取り戻し、今をともに生きる村人だけでなく遠い祖先たちの魂も身近に感じながら、自分の魂を浄化することのできる場所。
- ⑤ 大自然に囲まれ人間と自然が共生しながら暮らすなかで、人間が本来もっていた動物的な本能を呼び覚まし、都会では重視されていた知性や理性なしに存在することのできる場所。

—9—

問3 傍線部②「(神)もそのひとつである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 18。

- ① 現代の日本人は、「自然」や「神」という日本に古来より伝わる言葉の代わりに外来語を用いることの矛盾に気づいていないばかりか、むしろ進んで外来語を用いているということ。
- ② 現代の日本で「自然」と表現されるものは「森羅万象」と言った方が正確であるように、今私たちが「絶対神」と表現しているものは「里の神」と言った方が正確であるということ。
- ③ 「(里)の「自然」や「神」は、人間が自分たちと同じ時空のなかにそれらを感じることで存在してきたのに、現代人はそれらの実在を知性で証明できると思っているということ。
- ④ 日本の伝統的な自然や神を、外来の概念を伴う「自然」や「神」という言葉で言い表すことはできないが、現代の日本人はそれ以外の表現方法をもっていないということ。
- ⑤ 「(里)の言葉遣いが失われた現代の日本では、かつては私たちとともにあった「自然」や「神」が言葉のうさだけで存在する無意味ではないものになってしまったということ。

—10—

問4 傍線部④現代人は、一度、このような「里」を捨てようとしたとあるが、それはどうしてか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は **19**。

- ① 「里」よりももっと広くて進歩した世界に出て行くことで、自分の魂が生き生きと活動できるようになると信じたから。
- ② 一方で「里」を出ることの虚しさを感じつつも、知性によって進歩していくしか人間の生きる道はないと思い込んだから。
- ③ 都市や全世界といった広い世界に目を奪われて、「里」こそが人間を真に自由に進歩させるという真実を見失ったから。
- ④ 「里」を捨ててひたすら進歩を求めようになつてはじめて、広い世界と深い世界が両立することに気づいたから。
- ⑤ 知性によって進歩していく人工的な世界に魅力を感じ、その世界で生きていくには「里」を出るしかないと考えたから。

問5 本文の内容と合致するものとして最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は **20**。

- ① 近年の歴史学や歴史社会学の研究は、一度は「里」を捨てた現代人に改めて「里」を求めるように訴えかけている。
- ② 現代の日本人は、外来語の自然が人間の外にある客観的な自然体系を表現する言葉であると誤解している。
- ③ 言語の概念は知性と関わるものであるため、知性では把握できないものを表現しようとする無理が生じる。
- ④ 「里」が多くの問題を抱えているのは論理性を超越しているからであり、それを克服することが今後の課題である。
- ⑤ 二十世紀の社会が平和を求めつつ戦争を繰り返してきたのは、知性に対する根源的な信頼が欠如していたからである。

第3問 次の文章を読んで、後の問い(問1～3)に答えなさい。

じつは、ボッティチエリやダ・ヴィンチやミケランジェロが活躍した十五、六世紀には、「芸術」という概念も「芸術家」という職業も存在していません。

私たちがどのような意味での「芸術家」という概念が生まれたのは、十九世紀なかばを過ぎてからのことであり、今日、芸術家という職業に対して払われるような敬意は、当時の社会にはまだ存在していなかったのです。

当時の絵画彫刻の制作は、今日の感覚でいえば「工事」に近いもので、値段も作品の大きさや使う材料によって計算されるのが普通でした。

発注主である教会や貴族と作者との間で契約書が交わされ、そこには納期、予算、寸法、題材から、使用する絵の具の品質に至るまでの、細かな取り決めが記されていました。なかには、納入後一定期間内に生じた破損や褪色などは、作者の責任で補修するという、今日でいう保証サービスにあたる条項を含む契約までありました。

こうした契約で明らかのように、当時の絵画彫刻の制作は、「作家」としての芸術家ではなく、「業者」としての職人に依頼されるものであつたわけです。

ミケランジェロにしても、六十代のなかばに教皇の特別認可によって脱退を許されるまでは、石工の同業者組合に所属しています。六十代なかばといえば、ミケランジェロが『天地創造』を天井に描いたシステイナ礼拝堂の祭壇側壁に、約一五×二メートルという六階建てビル壁面相当の大壁画最後の審判を描き上げた頃のこと。ドイツ近代を代表する詩人ゲーテが、「人間の成し得る偉業というものを知りたければこれを見よ」と絶賛したミケランジェロの「芸術」も、十六世紀の職業観では、石工や鍛冶屋のような製造業の一種と見られていたわけです。

しかも、当時の絵画彫刻は注文制作が基本で、依頼主から直接依頼される受注側の立場は、どうしても弱くならざるを得ません。後世の絵画市場のように、(1)画商という専門の業者が売買の仲立ちをすることもなければ、市場の自由競争によつ

て人気画家の絵が値上がりすることはありませんから、契約はつねに買い手の側にとって有利な条件で結ばれざるを得なかったわけです。

社会もまた、中世以来の身分秩序である、祈る人(聖職者)、戦う人(騎士)、働く人(労働者)という三段階の階層を基本に形成されていきましたので、最下層の「働く人」の身分に属する職人に過ぎない画家や彫刻家が、神の代理人である聖職者と対等な関係で交渉することなどは、到底考えられなかったはずで

す。システイナ礼拝堂の天井画の制作が長引いていることにしびれを切らした教皇ユリクス二世に「いつになったら終るのか?」と聞かれたミケランジェロが、「私が完成させた時です」と答えたというエピソードが残されています。

もの作りの仕事は、作り手はその出来に納得した時にしか終わらない、という意味でしょうから無愛想なりに誠実な姿であつたはずですが、これを知った教皇は烈火のごとく怒り、「余が汝に完成させてくれる」と怒鳴りながら、⁽²⁾手にした象牙の杖が折れるまでミケランジェロを打ち懲らしたとい

います。教皇に愛され、友人にも近い処遇を得たというミケランジェロでさえ、身分社会での注文仕事の現実には直面せざるを得ない局面があつたわけ

です。そうした十六世紀のミケランジェロの境遇と違い、二十世紀の絵画市場に活躍の舞台を得たピカソにおいては、事情はまったく正反対

でした。いち早くキエゾスムに着目し、ピカソの筆頭画商となつて半世紀以上にわたる取引を結んだカーンワイラーは、ピカソのアトリエを訪れた際には、たとえ何時間待たされようと、いかに不快な態度をとられようとひたすら耐えて、作品を手に入れるまでは決して帰らなかつたとい

います。なにかの話題をめぐつて議論をする際は、どれほどピカソが愚かな意見を述べようと絶対に彼を言い負かすことがないよう心掛

け、ともかく巨匠が気持ちよく絵を渡してくれるよう仕向けることに全力を注いだとい

います。画商が「いくら馬鹿にしても帰らない」こととうんざりしたピカソは、「早く帰ってもらいたいばかりに絵を渡してしまうと

話っていますが、そうした自分の態度も画商とつきあう作戦のひとつであると告白しています。

一方でピカソは、印象派の販売で上得意の客筋を確保していた画商ローザンベールとは、彼の画廊の隣りに移り住むほどの緊密な連携ア

レートを展開し、ローザンベールが各国で開催した大規模な展覧会により、今日のピカソ評価の基礎を築き上げてい

ます。ピカソの成功の秘密は、十九世紀後半に急成長した画商というビジネスの可能性を正確に見抜き、自分の作品の市場評価の確立と向上にあ

たつて、彼らが果たす役割というものをとことん知り抜いていた点にありました。二十世紀に爆発的に拡大する美術市場における、画商というプロフェッショナルの **a** 的な活用に関して、ピカソほどの才覚を發揮した画家はいなかつた

のです。今日の私たちが知るような画商がヨーロッパ美術史に登場したのは、レンブラントやフェルメールで知られる十七世紀のオランダ

でのことでした。これは、ルネッサンスに続くバロックと呼ばれる時代に起きた美術史上の一大事件であり、⁽³⁾絵画の制作事情を一変させてい

ます。契機となつたのは、十六世紀の宗教改革です。教会の退廃と虚飾を告発し、聖書が禁じる偶像崇拜にあたる宗教美術を否定した宗教改革は、それまで絵画彫刻の大スポンサーであつた教会からの注文を激減させてしまい、画家彫刻家のすべてを生業の危機に追い込むことになつた

からです。キリスト像や聖母像、聖書の一場面といった宗教的な主題を失つた画家たちが、それらに代わつて描き始めたのが、市民の肖像や市民生活の一場面や、静物や都市景観や田園風景といった **b** 的な題材で、風景画や静物画という私

たちにはおなじみの絵画ジャンルはこの時期のオランダで生まれています。貿易で財を成したプロテスタント国であつたオランダでは、新興の富裕商人が好んで絵画を購

入し、教会の注文による宗教美術に代わつて、市民の購買が支える絵画市場が急速に発展しつ

つありました。フェルメールの描いた市民生活の一場面や、レンブラントの描いた市民自警団の集団肖像画は、そうした十七世紀オランダ市民の活気を今日に伝える視覚史料でもあるのです。

画商という美術の専門業者が生まれたのも、この地でのことでした。教会や王室が美術品の注文制作を好んだのに対して、新興富裕階級である市民は既製品の在庫の中から好みの美術品を選んで購入するのが好んだからです。

こうした市民需要に対応して、多くの画家の作品を常備して顧客が好みの絵を選べるような専門店として画商が登場、画家もそうした市場環境に適応して、それぞれ風景や静物や生活風俗といった自分が得意とする絵の既製品を量産して生計を立てる、専門画家へと分化していくことになりました。それまでは、風景画家や静物画家や肖像画家といった専門分化した画家の営業スタイルは存在していなかったのです。

この十七世紀オランダで生まれた画商という新ビジネスが、大躍進の機会を得ることになったのが、印象派の登場した十九世紀後半のフランスでのこと。十八世紀の終わりのフランス革命で、絵画彫刻が、宗教改革で失った教会に続いて王侯貴族というスポンサーまでを失いつつあった時代のことでした。

絵画彫刻が、もはや市民市場にしか頼る経済基盤がなくなっていたこの時期に、突如出現した印象派という前衛絵画が画商というビジネスに、従来はなかったギャンブル的な **c** 性を与えることになったからです。

モネ、ルノワールら印象派の作品といえは、今日ではヨーロッパ絵画の代名詞として親しまれていますが、その軽快なタッチと明快な色彩も発表当時は、「粗雑で浅薄な描き方の前衛絵画」としか見なされていませんでした。

おかげで新進画家時代の彼らの絵の買い値は極端に安く、画商は画家の最低限の生活費を保証するだけで、大量の作品を仕入れることができました。若き日のモネもルノワールも、日々の食費や家賃を得るために二束三文で絵を売っています。

当然ながら、そうした安値で仕入れられた絵というものは、ひとたび市場で評価を得た場合には、画商に大きな利益をもたらすこととなります。実際に、モネやルノワールの作品は、はじめは徐々にでしたが、やがて **d** 的にその評価と値段を上昇させていくことになり、これを扱う画商には大成功もたらされることになりました。

仕入れ値の安い「前衛絵画」は、いったん当たれば巨額の利益を生み出すのです。

この印象派ブームに沸くバリの美術界に、当時、世界有数の経済大国になつたばかりのアメリカの財力が流入するに至つて、

絵画市場は文字通り爆発的に拡大することになります。とりわけモネはアメリカで抜群の人気を誇り、当人も、自分の作品が描くそばから「ヤンキー」の手に渡ってしまうことを嘆いています。

当時盛んに使われた「アメリカ値段」という言葉があります。バリの画商は、財力を誇示したがるアメリカの新興富裕階級の虚荣心につけ込む作戦に出て、フランス人なら買ひそうもない値段で絵を売りつけていたのです。

こうしたアメリカ向けの高額取引は、フランス国内での絵画価格を吊り上げることになり、この高騰がさらに「アメリカ値段」を吊り上げていくことになるという、まさに画商にとっては笑いの止まらない状況が、十九世紀末から二十世紀初頭にかけてのバリ絵画マーケットに出現することになりました。

十九歳のピカソが、故国スペインから初めてパリに出て来たのは一九〇〇年。絵の市場が爆発的に成長することになる二十世紀絵画バブルの前夜のことだったのです。

ピカソの画家としての幸運は、まさにこの二十世紀初頭という時期に新進画家としての評価を確立して、印象派に続く前衛のスター作家を求めていたマーケットの要請に、完璧に答えてみせた点にありました。

そういう意味でピカソは、絵画史上に初めて登場した「最初から投機目的で買われる絵画」というものを象徴する存在といえます。

(西岡文彦「ピカソは本当に偉いのか?」より)

問 1 空欄 **X** に入れるのに最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選びなさい。解答番号は **21**。

- ① 買い手の画商が臣下の側に回っていた
- ② 買い手が画家の才能に気づいていた
- ③ 買い手が画家を心の中では蔑んでいた
- ④ 買い手の方が画家より一枚上手だった
- ⑤ 買い手の側にも芸術的な才能があった

問 2 空欄 **a** ～ **d** に入れるのに最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし同じものを繰り返し用いてはけません。解答番号は a | **22**、b | **23**、c | **24**、d | **25**。

- ① 投機
- ② 戦略
- ③ 倫理
- ④ 世俗
- ⑤ 加速度

問 3 傍線部(1)「画商という専門の業者」とあるが、彼らが社会に登場し躍進した背景となる出来事を述べたものとして適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選びなさい。解答番号は **26**。

- ① 宗教改革によって、かつては絵画彫刻を数多く注文していた教会からの制作依頼が激減してしまったこと。
- ② 貿易などで富を得た商人らが、教会に代わって絵画を購入するようになり、絵画市場が生まれたこと。
- ③ 財を成した新興市民が一度に大量の絵画を求めたことで、多くの画家の作品を常備する必要が生じたこと。
- ④ 社会の政治的変動により、それまで絵画彫刻の制作を依頼していた王侯貴族が世の中から姿を消したこと。
- ⑤ 市民市場において絵画や彫刻の売買を仲立ちすることで、多額の利益を得る可能性が生まれたこと。

問 4 傍線部②「手にした象牙の杖が折れるまでミケランジェロを打ち据えた」とあるが、教皇がこのような態度を取ったのはどうしてか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 27。

- ① 神の代理人である聖職者の教皇は、神との約束を簡単に反故にするミケランジェロの傲慢な態度を決して許すことができなかったから。
- ② 身分の低いミケランジェロが、最上位の身分である教皇の質問にまともに答えようともせず、教皇を小馬鹿にするような態度を取ったから。
- ③ 制作などしたことのない聖職者の教皇には、制作について誠実な思いを述べたミケランジェロの言葉の意味が十分に理解できなかったから。
- ④ 社会の最下層に属するミケランジェロが、最高階層に君臨する教皇の意向に添わない行いをしたばかりか、教皇に対して自己主張をしたから。
- ⑤ 一介の職人にすぎないミケランジェロを友人として処遇していた教皇は、契約を果たさずとしないミケランジェロに深く失望したから。

問 5 傍線部③「絵画の制作事情を一変させています」とあるが、「絵画の」制作のあり方はどのように変化したのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 28。

- ① キリスト像や聖母像といった宗教的な題材を描き、それを制作者自ら教会に売り込むというあり方から、画家が自分の得意とする題材を描き、それを画商に売ってもらうというあり方へと変化した。
- ② 依頼主から直接注文を受け、作品の題材や材料などについての細かな取り決めに従って制作するというあり方から、芸術家が自分の思うような作品を自由に制作するというあり方へと変化した。
- ③ 教会の発展に寄与するような宗教美術を誠実な態度で制作するというあり方から、新しく登場した市民らの生活を進展させるためにも、市民の肖像や生活を描くというあり方へと変化した。
- ④ 職人としての制作者が、依頼主の希望に添いつつも自分の技術を生かして納得のいくように制作するというあり方から、作家が自分の個性を思う存分に表しながら制作するというあり方へと変化した。
- ⑤ 教会や王室の命に従い、自らの能力を何ら発揮できないままに制作を強要されるというあり方から、才能さえあれば顧客や画商を魅了するような作品をいくらかでも制作できるというあり方へと変化した。

問6 筆者は、ピカソをどのような画家だと考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 29。

- ① 絵画制作の才能はミケランジェロほどではないが、画商を自由自在に操り、彼らを使って自分の作品の値を上げること
に成功した画家。
- ② 画商というビジネスの可能性を正確に見抜き、当時の絵画市場において、自分の作品を言葉巧みに高額で売りつける術
に長けた画家。
- ③ 画商とうまく付き合い、急速に拡大する美術市場を巧妙に利用することで、自分の作品の市場価値を高めるといふ才能
を有した画家。
- ④ 絵画市場が拡大するという好機に遭遇し、当時前衛絵画であった印象派の画風を真似することでマーケットの要請に完
璧に応えた画家。
- ⑤ アメリカ資本が絵画の価格を吊り上げていた時代に画家となり、そのアメリカで抜群の人気を得るといふ非常に幸運に
恵まれた画家。

問7 本文の内容と合致するものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 30。

- ① 自身も芸術家であるゲーテは、ミケランジェロの時代にあつて彼の作品の偉大さに気づき、その才能を褒めたたえた教
少ない人物のうちの一人であつた。
- ② 風景画家や静物画家は昔から存在したが、彼らが世に認められるようになったきっかけを作つたのは、彼らのスポンサー
であつた王侯貴族たちである。
- ③ 養蚕当初は人々から顧みられなかつた印象派の作品に高い値がつくようになったのは、彼らの作品の芸術性が徐々に理
解されるようになったからである。
- ④ 十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、アメリカの新興富裕層は、異常なほど高い価格で絵画を売りつけてくるバリの
画商たちを苦々しく思つてた。
- ⑤ 今日では自明のこととなっている、特別な才能をもち人々から敬意を払われる「芸術家」といふ概念が形成されたのは、
近代以降のことである。

解 答

公募制推薦入学試験 前期A日程 2016年度

	問題番号	解 答		問題番号	解 答		問題番号	解 答		
第1問			第2問			第3問				
問1	a	1	3	問1	16	4	問1	21	1	
	b	2	3	問2	17	1	問2	a	22	2
	c	3	4	問3	18	4		b	23	4
	d	4	1	問4	19	5		c	24	1
	e	5	5	問5	20	3		d	25	5
問2	a	6	5				問3	26	3	
	b	7	2				問4	27	4	
	c	8	4				問5	28	2	
	d	9	1				問6	29	3	
	e	10	3				問7	30	5	
問3	a	11	2							
	b	12	4							
	c	13	1							
	d	14	3							
	e	15	5							